

私のより所

教授 安井 喜行
(社会福祉学)

研究活動に身を置くようになって23年。そのうち本学で12年間お世話になった。私にとって在職期間がもっとも長い職場になった。図書館でよく利用した本といえば、『戦後社会福祉基本文献集』に収録されている総評調査研究所社会保障対策部編『生活保護―意見と生活の実態調査(1960年)』(復刻)である。それ以外はあまり熱心な利用者ではなかった。いまは簡単に入手できるようになったが、過去の国勢調査データを探して近くの府立資料館に通ったことが思い出される。

個人的な本とのかかわりでふり返ると、社会福祉関係の季刊雑誌の企画・編集に10年近く携わってきたことが大きい。編集を担当していた大学時代の同級生の後釜として誘われたことが直接的なきっかけである。やってみようと思ったのは、戦後「社会福祉本質論争」の場を提供した『大阪社会福祉研究』(発行：大阪社会福祉協議会、1952～1955年)の関係者が編集長だったことである。また、民間社会福祉現場を基盤に「国民とともに福祉の未来をひらく 社会福祉労働者に確信と勇気を与える」総合大衆紙という性格と誌面づくりも魅力のひとつであった。

実際にやってみると、企画から原稿依頼、座談会のテープ起こし、原稿・写真・図表の割付、校正、印刷所との交渉などの編集実務



は思いのほか大変だった。年4回発行の季刊雑誌は月刊誌のように新しい情報をタイムリーに提供することはできない。それでも読んでもらえる企画力が問われる。子どもや障害者、女性、高齢者などに細分化された社会福祉の領域を横につなぎ、保健・医療や教育との連携を明らかにする視点と枠組みがなければ、月刊誌に太刀打ちできない。社会福祉の総合誌という難しさを痛感させられた。

「現代の貧困」や「在宅福祉」政策をテーマにした雑誌編集は、社会保障・社会福祉の役割と課題を具体的に考える絶好の機会であり、場となった。そんなこともあって、研究の道にすすみたいという気持ちを固めたときに発刊当時の『大阪社会福祉研究』の合本をいただいた。私にとって歴史的な宝物である。

いまひとつ、私にとって大切な資料は、「生活問題調査」の報告書である。その大半

は、恩師・三塚武男先生（同志社大学名誉教授）が取り組まれた調査報告書である。私が調査員として初めて参加したのは、1971年12月の寝屋川市の委託調査（『寝屋川市の地域分析』）。院生1人と私たち学部生6人が調査員で、市役所の一室で夜遅くまで統計資料を整理したことや研究室のタナックによる集計作業の場面が今でも思い浮かぶ。

1995年の滋賀県安曇川町（現高島市）社会福祉協議会「ふれあいのまちづくり事業のための福祉実態調査」では、調査の企画・実施から集計・分析、報告書作成まで全過程を体験した。社会学専攻の同僚にエクセルの使い方を指導してもらい、初めてコンピュータによる集計に挑戦した調査でもあった。「公的介護保険構想」が発表されたこの年には、「障害（児）者・家族のくらしと介護者の健康調査」の集計と分析作業に参加した。障害（児）者をかかえているお母さんや支援学校の先生をはじめ512名が調査員となって、3千名を超える協力を得たかつてない調査であった。

阪神・淡路大震災後に大きな社会問題となった「孤独死」に関する調査も、忘れられないものである。兵庫県社会福祉協議会の委託を受けて、震災から2年後の1997年1月～3月、三塚武男先生を代表とする生活問題研究会が調査に取り組んだ。ところが、報告書の最終校正が終わった段階で、行政批判があるものを公表できないという理由により、自費出版（『『孤独死』－いのちの保障なき『福祉社会』の縮図』）せざるを得なくなった、い

わくつきの調査である。2011年3月11日の東日本大震災から4年目、いまでも「孤独死・震災関連死」は後を絶たない。20年前の阪神・淡路大震災の教訓が生かされていないという思いにかられる。調査結果は1997年の日本社会福祉学会で共同報告したが、私たちの力不足でいまは調査報告書の存在すら知られていないようだ。

「調査なくして発言権なし」とは毛沢東の言葉らしいが、対象世帯を一軒一軒訪問し、日頃くらしや医療・健康のことで思っていることや悩みごと（＝「くらしの声」）をききとる訪問対話方式の調査は、郵送方式によるアンケート調査や行政による断片的なニーズ調査と異なり、「住民の生活白書」としての内容を有している。1回限りの調査であっても、その内容は今日の課題をとらえる手がかりを与えてくれる貴重な財産である。

必要に迫られて本棚を整理していると、大学3年時の学生研究会の論集が出てきた。そこに「生活意識調査における理論的仮説設定にあたって」という大それたテーマで投稿していた。調査実習として京都の労働組合の協力をえて実施した「生活意識調査」の結果をまとめたものだ。電報・電話局や国鉄、京阪電車、トラック運輸、清水焼などの労働組合を訪ね歩いたことをいまでも覚えている。

調査は、テーマとヒマ、カネ、人手がかかる作業である。時間的な余裕ができるこれからの人生、機会があれば研究の基礎を鍛える調査活動に参加したいと思っている。